

学長式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

長野県立大学は、皆さんを心から歓迎致します。また、ご家族の皆さまにも、心よりお祝い申し上げます。

長野県立大学は、一昨年4月に開学した新設大学ではありますが、91年の歴史と伝統を持つ長野県短期大学の高邁な精神と伝統を引き継ぐ、県民の大きな期待を担った4年制大学です。皆さんは、その三期生になります。

本学に入学を決めた皆さんは、最良・最善の選択をしたと思います。本学の教育方針、カリキュラム、教職員スタッフ、学習環境、設置センター、コンパクトな新キャンパスなど、どれ一つをとっても、全国の大学のトップレベルにあると自信を持って言えるからです。本学の目的も明確です。「豊かな人間性を養い、グローバルな視野を身に付け、長野に軸足を置きながら、新たな時代に活躍できるリーダーやプロフェッショナルを輩出すること」です。

そのために、一年次は全寮制をとり、共同生活をする中で、自立、協調性、社会性、思いやりなど、上に立つ人間として必要とされる力を磨き、2年次には、海外研修プログラムに全員が参加します。日本と異なる多様な文化・風土・価値観を、各専門分野を学びながら体験し、グローバルなコミュニケーションスキルや幅広い視野・知見を身につけます。

更に、本学は、ゼミ形式の授業を通して、教員と学生との距離が近い親身な教育を行い、皆さんの心に火をつける授業を行います。教員が皆さんを積極的に学びの場に巻き込み、フィールドワークなど実践的な活動を体験させ、学ぶことの面白さや醍醐味に触れさせます。こうしたカリキュラムによって持続的に学ぶ力を身につけ、人生100年時代を生き抜くために必要な能力を獲得できるようにいたします。

今、新型コロナウイルスが猖獗を極め、世界中が大混乱の只中にあります。

今から152年前、幕府と官軍が上野の山で激突した時、江戸市中はまったくの混乱の中でしたが、そうした時に、福沢諭吉はウェーランドの経済書を手にとり、「世の中にいかなる騒動があろうとも、学問の火を絶やしてはならない。この塾がある限り、日本の洋学の命脈が絶えることはない」と言って、授業を続けたと言われます。

長野県立大学も、たとえ新型コロナウイルスが世界中を騒がせようとも、学問の火を絶やさず、学び続ける大学でありたいと思います。そのために、万全の準備を重ね、安全で目が行き届く長野県の小規模大学の強みを活かし、授業を開始いたします。

皆さんに一つお願いがあります。コロナウイルス感染対策は大学だけでは限界があります。コロナウイルスが猛威を振るっている間、皆さんにも自分たちの日々の行動に、大人としての自覚と責任を持っていただきたいということです。さもないと自分ばかりか、周りの人たちにも大きな被害が及ぶ危険があります。ぜひ自粛すべきところは自粛して、責任ある行動をお願いいたします。ただ、自粛はしても、委縮する必要はありません。この災いが皆さんにとって、むしろ大きな成長を促す試練だとプラスに考え、ぜひ前向きな行動をとっていただきたいと思います。

すでに、皆さんの前には、この道を切り拓いてきた一期生、二期生がいます。彼らは、昨年10月の台風19号によって被災された千曲川周辺の住民のために、積極的にボランティア活動に参加し、被害に遭われた方々を力強く支援してきました。本学は彼らの行動を誇りにしています。アインシュタインは「人の価値は、その人が得たものではなく、その人が与えたもので測られる」と言いました。私もそう思います。皆さんは、そうした先輩と力を合わせて、この地に豊かな未来を生み出す知の礎を創り、本学の教職員と共に新たな時代に相応しい長野県立大学の歴史を築いてほしいと思います。

大学は人生のスタートラインです。これから始まる長い人生が素晴らしいものとなるかどうかは、大学での4年間にどれだけ自分の持っている能力を磨けるかにかかっています。良い本を読み、良き友を見つけ、良き先生と出会い、進んで皆と語り合い、実り豊かな学生生活を過ごし、二度とない青春を謳歌することを心より切望いたします。

最後に、皆さんと直接お会いできる日が、一日でも早く来ることを祈ります。

以上を祈念し、私の式辞といたします。

令和二年4月吉日

長野県立大学 学長 金田一真澄